トピックス

53年ぶりに飛んだ国産機MRJ

開発が進められている国産ジェット旅客機「MRJ（三菱リージョナルジェット）」。

11月11日、赤、黒、金のラインが描かれた真っ白な機体が青空に飛び立った。

待望の初飛行に成功し、現在、2017年の初号機導入を目指して飛行試験が重ねられているところだが、残念な知らせも聞こえてくる。

国産旅客機の初飛行は戦後初のプロペラ旅客機YS11以来、53年ぶり。

2008年の事業化から7年、この初飛行に日本中が湧いたことは、まだ記憶に新しい。

県営名古屋空港の滑走路から離陸した瞬間、スタッフや見学者から歓喜の声が上がっていた。

初飛行のパイロットを務めた安村佳之（やすむら　よしゆき）機長は「離陸速度に達したら飛行機が『飛びたい』と言っているような感じで、フワッと浮き上がりました」と笑みを浮かべながらインタビューを受けていたのは印象的だ。

その初飛行を助けたのは、同じ空港内に隣接するJAXA（宇宙航空研究開発機構）である。

実験用航空機「飛翔」が、天候偵察を行ったほか、航空自衛隊 岐阜基地所属の練習機「T4」、三菱重工業の「ビーチ400」が随伴機としてともにフライトした。

三位一体の飛行は、大変かっこよく飛行技術力も大変すごいと感じられるものであった。

早く大空へ飛んで欲しいが、やはり安全面を最大優先する日本人気質がそうさせるのであろう。プロペラ旅客機YS11以来、半世紀がたち、今は、初産の生みの苦しみといったところか。

最後に三菱航空機がMRJの武器として掲げているのが、従来の同型ジェット機と比較して20％以上優れているという燃費性能や機内の快適性だ。

その実力をアピールするためにも、いち早い飛行の実現が待たれる。